

仕合わせ

の和

第191号

H. 30. 2. 1

(毎月1日発行)

『臨死体験』について

住職 谷川寛俊

新川地区には滑川市(長福寺)、魚津市(真成寺・長教寺)、黒部市(経妙寺)、朝日町(妙輪寺)の五ヶ寺の日蓮宗寺院があります。これを組す(くみじ)と言つて、行事があるごとに互に行き来し協力している特に縁の深いお寺様という事になります。その中の、朝日町にある妙輪寺ご住職である日高隆雄上人は、僧侶の顔と、産婦人科医としての顔を持ち、現在、黒部市民病院の副院長として学会や、多くの研修会で研究発表をされる名医でもあります。日高上人は鹿兒島県の出身で、約三十年前に縁があつて妙輪寺に入られました。そんな日高上人ですが、過日ある機関紙に投稿されておられ、そこに掲載されていた記事に感銘を受けましたので、ご本人の許可を得て皆さまにご紹介させていただく事に致しました。

以下、日高上人の記事抜粋となります。

臨床現場では医学の立場からはどうしても理解・説明できないことが稀に起こります。そのひとつに「臨死体験」があります。「広辞苑」では「死の瀬戸際での体験。死に瀕して、あの世との世との境をさまよう体験」と説明されています。臨死体験の報告は年々増えており、その背景として、救急医療の進歩による死のまぎわから救命される患者の増加が考えられます。評論家の立花隆さんは「臨死体験く死ぬときの心はどうなるのか」というNHK番組の中で臨死体験に関する最新研究を脳科学・哲学・宗教に至るまで紹介しました。最終的な結論は出ませんでした。が、「魂(意識)」の正体は何なのか、という大きな問題にも言及しました。

私はこれまで産婦人科医として、産後の大出血や心不全等で危篤状態に落ち入り、死ぬか生きるかの瀬戸際に追い込まれた妊婦の治療にも幾度となく携わってきました。以前、大学病院に勤務していた時のことです。ある妊婦が意識も無い重篤な状態で搬送されてきました。母体が重篤な状態であれば、必然的に胎児も危険な状態に落ち入ります。ほつておけば母児ともに生命の危機に陥るため、まずは緊急帝王切開

で児を救命しました。術中・術後、母体は我々医療スタッフももうダメかと諦めそうになる死線をさまようことになりました。術中に3回の心停止をきたしましたが、電気ショックで甦りました。最終的に、産婦人科、麻酔科、救急科、循環器内科の垣根を越えたスタッフによる必死の救命処理が実り、部分的な記憶喪失を残すだけで奇跡的に回復し、この世に生還することができたのです。退院前に本人から伺った話ですが、医療スタッフが必死に救命処理をしている時に、本人は病室の天井の片隅からベッドに横たわつて処置を受けている自分と我々スタッフを眺めていたというのです。そして此の岸から、三途の川を渡るうかというまさにその時、彼の岸に亡くなったお婆ちゃんが見えて、「あなたはまだそちらで頑張つて子供を育てなさい」と言われたというのです。その後、病状は回復に転じ、意識も戻ったのです。私自身、このような臨死体験を他にも二人の患

「仕合わせの和」と打ち込んで頂ければ、ホームページにつながります。

編集・発行
玉蓮山 真成寺
編集部 谷川久仁子
TEL・FAX 0765-22-2268
携帯 080-3744-2523
こちらの番号でもお寺につながります。

者から聞く事ができました。不思議なことにはずれの患者も同じ様な経過をたどっています。これだけ科学が発達した医療現場の中で、医学的にどうしても説明できないことが起こっているのです。「臨死体験」の説明として、「脳内現象説・死の苦痛から逃れるための幻覚と説明」と「魂存在説・肉体が死んでも魂が存在し続けると説明」の二つの相反する説があります。これらのいずれが正しいとか、間違っていることではなく、人間の生死には我々の理解を超えている「何か」が働いているに違いありません。その「何か」は、まさに信仰から得られるものではないかと思ひます。この「臨死体験」の話を通じて、「死後の世界をどう受け止め、どう考えるのか」について檀信徒の皆さんにも伝えていきたいと思ひます。

以上のように綴られていました。皆さまは死後の世界について、どう思われますか？
信仰の世界から眺めれば、おのずと各人に明確な答えが見えてくるのではないかと思ひます。
皆さま方の益々のご精進をお祈り申し上げます。

